



Title	動詞のアスペクトの研究 : 内的時間構造を中心に
Author(s)	睦, 宗均
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51196">https://hdl.handle.net/11094/51196</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	睦 宗均
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第49号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	動詞のアスペクトの研究 - 内的時間構造を中心に -
論文審査委員	主査 教授 三原 健一 副査 教授 仁田 義雄 副査 教授 小矢野 哲夫 副査 助教授 岸田 文隆 副査 助教授 田野村 忠温

## 論文の内容要旨

この論文は、現代日本語のアスペクト、特に<継続相>をテーマとしている。

現代日本語のアスペクト研究史は、戦前から今日に至るまでの長い研究史を持っているが、なかでも、金田一(1950=1976)と奥田(1977=1985)による研究成果は、今日のアスペクト研究の根源を成すものといえる。

このうち、奥田(1977)による動詞分類は、現在最も広く受け入れられているもので、現代日本語のアスペクト研究における影響力は極めて大きい。しかし、奥田による「動詞二分法」(動作動詞=動作の継続/変化動詞=変化の結果の継続)に問題点が全くないわけではない。これまで、森山(1984)、三原(1997)、沖(2000)などによって、奥田(1977)の「動詞二分法」にも問題があることが指摘され、奥田の研究も完璧なものではなく、未だ論及する余地があることを示している。しかし、森山(1984)、三原(1997)、沖(2000)は、奥田の「動詞二分法」に不備があることを示唆しながらも、その問題の究明には至らず、問題の指摘に留まっているのが現状といえる。

このような現状を踏まえると、先行研究から指摘されている奥田(1977)の孕む問題について、その原因を明らかにすることは、奥田の研究を改善するだけでなく、現代日本語のアスペクト研究の更なる発展へ貢献できるものと思われる。

そこで、本稿は奥田の動詞二分法を批判的に検討したうえで、文法的形式「テイル」(=「文法的アスペクト」)と、運動動詞に内在されている語彙的意味(=「語彙的アスペクト」)を明らかに区別した。その上で前者と後者を結合(=「動詞のアスペクト」)する手段として、現代日本語のアスペクトを解釈したのである。

「アスペクト」は、一般的に二つの範疇に分かれる。このことは、マスロフ(1962)による「アスペクト」(aspect)と「アクチオンザルト」(aktionsart)という用語からもす

で確認されていたことが伺える。

「アスペクト」(aspect)という用語は、動詞の語形に反映される「文法的アスペクト」を意味し、<完成相>と<不完成相>(=継続相)の対立として捉えられる。それに対して、「アクションザルト」(aktionsart)は、文法化されていない範疇を意味し、個々の動詞が持つ範疇的意味と関わる「語彙的アスペクト」である。

現代日本語の「文法的アスペクト」は、基本的には「ル(タ)」と「テイル(テイタ)」の二つの形態論的形式が、<完成相>と<継続相>(=<不完成相>)の対立を成している。そして、<継続相>は、さらに<進行相>と<結果相>に二分される。

現代日本語の<継続相>に属する二つのアスペクト的意味、すなわち<進行相>と<結果相>は、特に文法的形式「テイル」に前接する動詞の語彙的意味が密接に関わっていることは周知の事実である。しかし、上述した奥田(1977)のいうようには二分できない。

アスペクト的意味と動詞との共起関係を綿密に検討すると、次のように四つのグループに分けられることが分かる。

- ① <進行相>と<結果相>共に用いられない動詞：「見つける」、「目撃する」…
- ② <進行相>のみを実現する動詞：「歩く」、「食べる」、「笑う」…
- ③ <結果相>のみを実現する動詞：「死ぬ」、「届く」、「着く」…
- ④ <進行相>と<結果相>共に用いる動詞：「開ける」、「作る」、「来る」、「登る」…

<継続相>の研究において、動詞の持つ語彙的意味(Lexical Meaning)は非常に重要である。しかし、上の動詞とアスペクト的意味の関係を考えると、金田一(1950)、奥田(1977)のように二つの語彙的意味を設定し、動詞を二分類することでは収まらない。

上記のうち、特に④の動詞は、次のように<進行相>と<結果相>を共に表す動詞である。

(1) 佐倉は園子を助けながら、一段一段ゆっくりと階段を登っていた。

<進行相> (孤高)

(2) 僕等は今よりかなり高くまで登っていた。

<結果相> (草の花)

現実の運動は、時間に沿って動的な段階を表す「過程」から静的な段階を表す「結果状態」へと展開していく。しかし、人間の持つ言語(=文)は、このうち一つの段階しか表現できない。そうすると、例えば上記の「登る」には、<進行相>と<結果相>のうちのいずれかを表すために、つまり展開されていく現実の運動に対応できるように、何らか

の機能を備えていることが予想される。

つまり、文法的形式「テイル」と動詞述語が共起する間には、何らかの一定の規則が存在するのである。このような「規則」が存在するからこそ、上記の例文ように、「語彙的アスペクト」(＝「動詞述語」と「文法的アスペクト」(＝「テイル」)が共起し、二つのアスペクト的意味<進行相>、<結果相>を実現できるのである。

そこで本稿は、「文法的アスペクト」と「語彙的アスペクト」、さらにその間に存在する「規則」を「アスペクト性」と呼び、この三つの下位アスペクトを統合する方法で、現代日本語の<継続相>を究明してきた。

以下、簡単に三つの下位アスペクトに対する本稿の基本的な立場をまとめた上で、これらの三つの下位アスペクトが<進行相>、<結果相>とどのように関わっているのかを述べることにする。

第1点目に、「文法的アスペクト」からみていく。

日本語の<継続相>、つまり<進行相>と<結果相>の表すアスペクト的意味の定義については、これまでほとんど議論されなかったという反省から、本稿は<進行相>と<結果相>の定義について改めて考察を行い、<進行相>の最も中核的な意味を“一時的な過程の継続”、そして<結果相>は“一時的な結果状態の継続”と規定した。

また、<進行相>と<結果相>に用いられる「テイル」についても分析を行い、それぞれが別の形式であること、すなわち「テイル」は多義語であることを明らかにした上で、<進行相>に用いられるものを「テイル1」とし、<結果相>に用いられるものを「テイル2」とした。

そして、本稿では現代日本語における<完成相>と<継続相>の関係についても考察を行い、①「ル」(完成相) ⇔ 「テイル1」(進行相)、②「ル」(完成相) ⇔ 「テイル2」(結果相) という二元的な関係を成していると述べた。

第二点目に、「語彙的アスペクト」についてまとめると次のようになる。

本稿では、「動詞の語彙的意味」を、運動の内的時間構造から捉えた。「運動の内的時間構造」というのは、運動動詞に内在されている運動の質的変化、すなわち時間の展開に沿って移り変わる運動のあり方を時間構造的に捉えたものである。本稿は、運動には、変化を伴う動的な段階「過程」と、その動的な段階の終了後に現れる静的な段階「結果状態」という異なる段階があるとし、前者を語彙的意味「過程」、後者を語彙的意味「結果状態」として捉えなおした。つまり、動詞の持つ語彙的意味には、「過程」と「結果状態」があり、動詞がこれらの語彙的意味をどのように内在しているかによって、運動動詞は「過程」のみが内在されている「動き動詞」と、語彙的意味「過程」と「結果状態」を共に持つ「結果動詞」とに二分類できることを示した。

第三点目に、「アスペクト性」についてみていく。

「アスペクト性」とは、動詞の有する時間的な特性で、語彙的意味「過程」の時間的構造を規定するものであるが、本稿では< (±) 状態性 >、< (±) 瞬間性 >、さらに< (±) 限界達成性 >という三つのアスペクト性があることを提案した。

まず、< 状態性 >は、運動動詞であることを規定するもので、運動動詞に語彙的意味「過程」が内在されているか否かによって、< (+) 状態性 > (=状態動詞) と< (-) 状態性 > (=運動動詞) とに分かれる。

次に、< 瞬間性 >というアスペクト性は、運動の時間的長さを規定するもので、「絶対的瞬間性」を表す動詞とそうでない動詞とに二分される。つまり、運動動詞は< 瞬間性 >というアスペクト性から、< (+) 瞬間性 >動詞と< (-) 瞬間性 >動詞とに分けられるのである。

最後に、< 限界達成性 >とは、運動に「限界点」を与え終了させる機能を持つアスペクト性を指すものである。この< 限界達成性 >の働きによって、運動は「-限界運動」(=< (-) 限界達成性 >) から「+限界運動」(=< (+) 限界達成性 >) に切り替えられるが、同時に「語彙的意味」と「アスペクト的意味」も変更されることになる。そして、本稿では< 限界達成性 >のあり方にも考察を行い、動詞が固有に持つ内在的意味による「内的限界」と、動詞以外の要素による「外的限界」とがあることを述べた。その際、「外的限界」を実現する「外的限界詞」には、「対格名詞句」、「～まで」句、「数量詞」などがあることも確認した。

そして、動詞に内在されている語彙的意味のあり方と、アスペクト性のあり方(< 瞬間性 >と< 限界達成性 >)を総合した形で運動動詞を再分類し、以下の< 表 2 >のように四つに下位分類した。

< 表 1 > アスペクト性による運動動詞の下位タイプ

運動動詞		語彙的意味		< 瞬間性 >	< 限界達成性 >	
		過程	結果状態		内的限界	外的限界
動き動詞	動き動詞 A	○	×	+瞬間性	○	○
	動き動詞 B			-瞬間性	×	○
結果動詞	結果動詞 A	○	○	+瞬間性	○	○
	結果動詞 B			-瞬間性	○	○

上記の四つの動詞タイプと< 進行相 >、< 結果相 >の関係を簡単にまとめよう。

- ① 「動き動詞A」：＜進行相＞、＜結果相＞両方とも表すことのできない動詞
- ② 「動き動詞B」：基本的に＜進行相＞のみを表すことのできる動詞
- ③ 「結果動詞A」：＜結果相＞のみを表すことのできる動詞
- ④ 「結果動詞B」：＜進行相＞、＜結果相＞両方とも表すことのできる動詞

最後に、これらの四つの動詞タイプが、＜進行相＞と＜結果相＞のそれぞれを実現させるための「必要条件」を、三つの下位アスペクトからもとめると、次のようになる。

(3) ＜進行相＞を実現するための「動詞のアスペクト」

- a. 語彙的アスペクト：語彙的意味「過程」を持っていること。
- b. アスペクト性：＜（－）瞬間性＞と＜（－）限界達成性＞であること。
- c. 文法的アスペクト：「テイル1」を取ること。

(4) ＜結果相＞を実現するための「動詞のアスペクト」

- a. 語彙的アスペクト：語彙的意味「結果状態」を持っていること。
- b. アスペクト性：＜（＋）限界達成性＞であること。
- c. 文法的アスペクト：「テイル2」を取ること。

(3) と (4) によって、つまり、三つのアスペクトが関係しあって、はじめて＜進行相＞の最も中核的な意味である“一時的な過程の継続”と、＜結果相＞の中核的な意味である“一時的な結果状態の継続”を実現することができるのである。

このような本稿の結果は、「アスペクト的意味の移行現象」、「アスペクト的意味の決まり方」など、アスペクトと関連する諸現象、そして「動詞分類」に対しても、明示的かつ統一的分析・記述ができているものと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

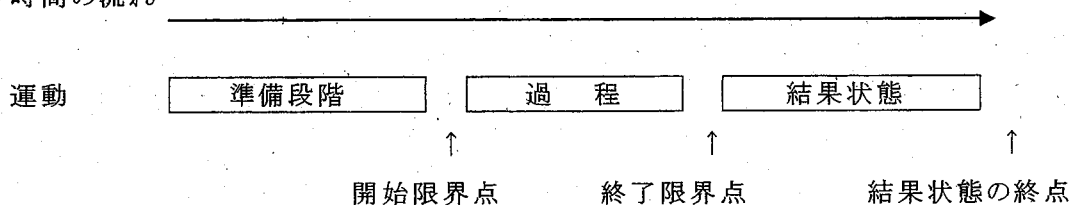
本博士論文が研究対象とするものは現代日本語における継続相で、動詞のアスペクトという観点から、「ている」形と運動動詞の相関関係を明確化することを目的としている。

「ている」形のアスペクト的意味は、「太郎が本を読んでいる」などが示す動作継続と、「窓が開いている」などで描写される結果継続の二種がその根幹である。「ている」に関する二種の意味が動詞の意味と連動することは、戦後においては金田一(1950)の研究を嚆矢として、その後、連綿と繋がる長い研究史がある。金田一の研究は、動作に要する時間の長さの観点から分類を試みたもので、継続動詞の「ている」形が動作継続に、瞬間動詞の「ている」形が結果継続になると主張した。しかし、その後の研究でこの見解は否定され、奥田(1978)に

よって、動作動詞の「ている」形が動作継続に、そして結果動詞の「ている」形が結果継続になるという総括がなされるに至った。

が、奥田の分類が十全かと言うとそうではなく、動作動詞でありながら「ている」形が動作継続にならない「一瞥する」「目撃する」などの動詞があり、また、結果動詞でありながら「ている」形が動作継続・結果継続に曖昧になる「散る」「伸びる」などの動詞がある。本博士論文は、研究史を緻密に辿った上で従来の研究の問題点を明確に指摘し、継続相が、語彙的アスペクトと文法的アスペクトの絡みにおいて明示的に理解されることを示したものである。そして、その結果として、動作動詞と結果動詞を、語彙的意味とアスペクト限定の観点から、それぞれ二種に下位区分することで明確な構図が見えてくることを示している。本博士論文の根幹となる主張は、動詞の内的時間構造が次のように構造化されるというものである。

時間の流れ



審査の過程で指摘された点は以下の通りである。著者は、「ている」自体が二義的であると主張し、結果継続の「いる」が存在を表す形式であり、動作継続の「いる」はそうではないとしている。両者が異なる形式を取る韓国語や、あるいは日本語でも方言によってはこれらを形式的に峻別するものがあることを勘案すれば、主張自体は正しいと思われる。が、その証明として用いられている様態副詞の共起可能性や主語の意味役割の違いは、「ている」に前接する動詞の意味の差によって現出するものであり、必ずしも「ている」の二義性の証明にはなっていないと思われる。また、著者が援用するアスペクト限定の概念は、研究者間の共通理解としては外的限界(項限定詞・付加限定詞)に特化したものであるが、著者は内的限界(意味的アスペクト)についてもこの概念を適用しており、研究者間の公分母と齟齬があるのではないかと。さらに、瞬間性に関する論述において、著者が主張するものとは別の構図を示す動詞類があり、論述に水が漏れる点が指摘される。この問題は、例えば、「財布を失くす」と「自信を失くす」のように語彙的意味が異なるものを、「失くす」という一形式の中に統合しているなどといった、語彙的アスペクトの概念規定の曖昧さという問題とも連動している。この点は複数の審査委員から指摘された問題である。また、審査委員の一人から、奥田(1978)が批判の俎上に挙げられているが、奥田による他の一連の論考に対する咀嚼が不十分であるという指摘もあった。韓国語の継続相に対する些かの問題点も指摘された。

しかしながら、全体としては極めて緻密な論理の下に構成された博士論文であり、細部に至るまで十分な考察を経た上で執筆されている点は高く評価される。また、留学生であっても、博士後期課程院生の論文としては当然のことかもしれないが、個々の表現に至るまで非常に自然な日本語で書かれており、文体的にも「見事」な出来栄であると言える。最終試験での質疑応答においても、深い考察を経た上で論述がなされていることが端々に現れており、自己が達成したことと問題点として残したことに対する認識が十二分にあることが感じら

れた。さらに、学会活動においても、全国学会扱いになる関西言語学会での二度の口頭発表と、当学会誌への二度の論文掲載、及び、韓国日本学会誌への論文掲載を行っており、その他の論文を含めて、研究者としての活動も十分に行ったと評価される。

以上のことより、審査委員会は全員一致で、博士論文・最終試験とも「合格」とすることに何らの異論も提出されなかった。